「就職活動体験記」に頻出する感情体験表現と出現文脈の検討

A Text Mining Analysis of Emotional Phrases and their Contexts in Essays on Job Searching Experience at JIYUGAOKA SANNO College

竹　内　美　香
Mika Takeuchi
豊　田　雄　彦
Yuhiko Toyoda
石　嶺　ちづる
Chizuru Ishimine

抄　録　一部を除き少子化により大学等の受験と入学が大きな困難ではなくなった現状では，就職が青年たちの人生において初めて直面する「キャリアの不安定」体験となってきており，そのサポートも重要性を増している。若年者の就職サポートを行う場面で「就職活動体験記録」の作成を求める支援機関も増えている。「体験記録」の作成過程では活動当事者の内省が促され，セルフ・カウンセリングの効果も期待できる。本研究ではそうした「就職活動体験記」をセルフ・カウンセリングのみでなく，さらにピア（同輩・後輩）サポートにおいて有効に機能させる方法を検討する。将来的には収集された先行体験者の記録をその後輩などが，自身の関心あるテーマやキーワードによって探索しやすいようカテゴリ化した形で参照できるシステムの構築を目指している。すなわち就職活動体験の全体像を把握し，教職員の支援を効果的に行うことを目指す。

本研究では，学生による「就職活動体験記」から用語間の関係性や共変性，まとまりなどを検出するテキストマイニングの手法でカテゴリ化を行い，「悲しい」「困っている」「不満」「不安」「諦め」などネガティヴな感情体験に関連する記述の分析を行った。その結果，「試験，面接の結果」「活動準備と探索活動」「人間関係による支援」「面接場面での体験」などの中心的な類型が示された。また，失敗体験に関する記述は，事例研究として読む際の印象以上に多いというデータも示された。教職員の事前の指導介入の効果が期待できる事項である。また一方で，個別の事案についてデータ解析だけでは検証できないサインが示される場合もあると確認された。原文の記述に立ち返り，必要に応じて対面的な相談場面に導入するなど，最終的には「人対人」の支援が必要である。教室場面で収集されるマス・データの初動処理として有益な所見を得られるという価値から，今後もテキストマイニング手法の適用可能性の検討は継続されるべきである。

キーワード　就職活動，キャリア教育，テキストマイニング，主題分析，感情体験，共頻出語

1. はじめに：就職活動の臨床発達心理学的位置づけとは
2. 方法1：対象者と実施手続き（「就職活動体験記」の課題指示など）
3. 方法2：テキストマイニングで探索する就職活動体験の記述
4. 結果：「就職活動体験記」の感情体験の記述を含む主題分析
5. 議論と考察：頻出する感情体験語と周辺文脈の検討
6. 結論および今後の課題

2011年１月17日　受理

1．はじめに：就職活動の臨床発達心理学的位置づけとは

1．1　キャリア教育の定義

我が国において「キャリア教育」という文言の適用が定着されたのは1999年（平成11年）の12月に中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」以降のことであるとされている。同答申のうち「学校教育と職業生活との接続」を取り上げるセクションにおいて「キャリア教育」の文言が本格的に適用され，今日のような学校教育課程に家庭・地域との連携を新たな特徴として盛り込んだ体験的職業学習プログラムが始動した。2002年には「キャリア教育の推進に関する総合的調査協力会議」が報告書をまとめ，本件の基礎的枠組みが提示された。

この報告書では「キャリア教育」を，「『キャリアの概念』に基づいて定義している。即ち，児童生徒一人ひとりのキャリア発達を支援し，それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育である」と定義している。2006年の文部科学省「キャリア教育推進の手引き」でも，キャリア教育の定義と目標を「子どもたちが『生きる力』を身につけ，社会の激しい変化に流されることなく，それぞれが直面するであろうさまざまな課題に柔軟にかつたくましく対応し，社会人，職業人として自立していくことができるようにする教育であり，…（中略）…『学ぶこと』と『生きること』を関係つけながら，子どもたちに『生きることの尊さを実感させる教育であり，社会的・職業的自立に向けた教育である』」と説明している。この手引きの中では，児童生徒の全人的な発達を促すという視点で教育課程そのものを点検・改善することが求められている。大学・短期大学・専修学校におけるキャリア教育体制も，前述の改革に連動する形で再構築が求められ，その方向性は今日まで継続されている。

大学・短期大学・専修学校で学ぶ年代の青年前期群は，学ぶ意味の発見，学びへの挑戦を持続する健康な動機と自己効力の獲得など，自己研鑽と自分が発達することへの希望を醸成する発達段階にある。このような能力や自己効力の感覚と態度を獲得する青年は，近い将来に自己責任を負って働く人材となった段階で多様な困難に出遭い，「働くのは何のためか」という根源的な問いに直面し，それでも主体的に自ら答えを探究することができると期待される。

「キャリア教育」という用語に対して，我が国においては職業occupationと職務jobの混同があり，その用語法の境界には曖昧さがある。このことは，現在の「キャリア教育」が，単なる職業紹介や職場体験を取り扱うことで充分とする誤解を生んでいることに関連している可能性がある。「キャリア教育」は，青年期の発達課題としても重要な自らの生涯構築に向けて，自己存在と困難を打開するための基礎力を獲得し，自己効力感を獲得しなければならない人々を対象としている。キャリア教育の目標と方法を考える時には，当事者である青年の内面に起こる発達的移行と「危機」（E.H.Erikson）を考慮することなしに進めることはできない。

1．2　キャリア発達の移行過程に起こる不安定についての先行的な知見

キャリア発達理論の理論的根拠はライフ・

スパン/ライフ・スペース理論的アプローチからキャリア・カウンセリングの実践の基礎を創成したスーパー（Super, D.E., 1990, 渡辺三枝子, 2007）の数多の業績の中に先見的に述べられている。スーパーはキャリア発達に関する研究的知見から14の「命題」を紹介している。

本研究で取り扱う学生自身の「就職活動体験記」の中の感情関連用語の記述は，スーパーの14の「命題」のうち特に，「キャリアの不安定」と「対処（感情と行動）」，「自己概念」などに呼応すると考えられる。本研究が検討の対象とする学生自身が記述する「活動体験記」にスーパーが示した命題の具体的な事例を観察することができる。

今日の学生の就職活動の過程は，大学・短期大学などの「学校」環境（ステージ）から，次段階への発達的移行の取り組みである。スーパーがこの過程に見出した「命題」では，「個人のキャリアが不安定になる」ステージであると規定している。「大学全入時代」とも呼称される大学等高等教育への就学実現率の高さ故に，多くの青少年の中で，大学入学までの「不安定」経験から耐性の獲得までは，昨今ますます希薄化している。個々の青年にとっての原初的な人生移行に伴う「不安定」も就職活動の時期にずれ込むという現象が起こってきているのは一つの特徴である。就職活動こそが，我が国の青年にとっての人生初の「不安定」となっていることは重要な意味がある。「キャリアの不安定」段階に対する対処と感情体験についてもスーパーは言及していて，その先見性には瞠目する。

本研究では，先行の諸研究において示唆されてきたキャリア探索の発達過程において，どのような情動的・感情的体験が当事者の内面に生起しているか，関連語の出現率などから検討しようとするものである。

１．３　学生自身による「就職活動体験記録」の作成の価値

ライフ・ステージ上の発達的移行として，青年にとっての就職活動は非常に大きな「イベント」である。キャリア・カウンセリング領域では，個々の青年の内面に，どのような自己概念の再構築の葛藤が生起しているのか，どのような局面でどのような種類，強さの感情体験が生起し，その過程ではいかにして対処行動が獲得，成熟するのかなどにフォーカスして支援・介入する。この場面に対する相談者側の課題は多い。介入の手がかりは常に個別的に探索され続けている。キャリア・カウンセリングの場面設定においては，来談者と支援担当者とのコミュニケーション過程の中で探索が進められる。大学・短期大学等では昨今，担任制に準ずるアカデミック・アドバイザ（指導担当教員）制をとることが増えている。直接のキャリア支援は専門の職員を擁する部門が担当し，アカデミック・アドバイザは，学業と課外時間を含む学生生活全般への関わりを通して，側面から学生の進路探索の活動を支援する。

教員の場合，多人数の教室成員（学生）に対面する形で総合的な支援を行う場面が圧倒的に多い。個別的に学生に対面し探索的コミュニケーションを通じて支援介入を行うことは重要であるが，初動は多人数の教室からスタートする。初動の重要性を意識しないと，個別的支援介入が困難になるということである。これは大学・短期大学等において，全学

的なキャリア・サポート体制を充分に機能させるためにも重要な側面の一つであろう。

ここ数年，民間と公的の両機関で若年者のための就業サポートを行う場面で「就職活動体験記」の作成を課することが増えている。多くは就職活動の振り返りを深める自己分析学習とセルフ・カウンセリングの一環として推奨する場合が多い。体験記録の作成を課することで，活動当事者である学生に自身の体験を言語化・整理・内面化させ，時にはセルフ・カウンセリングの効果も期待できると考えられているためである。「活動体験記」を作成することで青年は，自身の体験（特に情動的なイベント） を表出し，自分についての「気づき」を得ること，つまり自己分析の手がかりを得るなど認知的側面での効果が期待される。アカデミック・アドバイザには，多人数クラスのメンバーに対応しつつ個別の学生の状況を把握することが求められるが，「活動体験記録」は個々人の内面に生起する情動・認知の過程を知る手がかりとして活用することができる。

学生の書いた文書は，ただ収集するだけでは活用できない。文書をデータとし，そこに含まれる重要語によって簡単に検索でるように加工する必要がある。ただし，検索可能性を高めつつ，深みのある個人的体験の書かれた資料を，個人情報保護規定を遵守して安全に運用するという二律背反の「課題」をクリアする必要が，このデータベース構築の作業には含まれている。

学生個人の体験記録の検索と読み込みを行うことそのものは，担当教員の守秘義務の範囲で行われている。個別対応の一方で，社会・経済状況を背景として変動するマスとしての学生の活動体験と感情傾向を即応的に把握したいという教育的な要請もある。しかし現状の方法では時間的制約もあり，かなり難しい。「就職活動体験記」は，当事者が書くという価値を超えて，青年の自己-他者交流教育プログラムの活性化の方策の一つともなり得る。しかもその「体験記」を毎年データベースとして蓄積して，学生自身が仲間・同輩・先輩の記録を検索・利用できるシステムに整備する必要もある。

「活動体験記」をデータベースとして蓄積すると，キャリア探索中の学生は，その時々の必要に応じた言葉と，関連した事項やキーワードで同輩や先輩の体験記録にアクセスして学ぶことができる。このためには書かれた文書ファイル毎に，複数のキーワードのインデックスを付け，それをユーザー側からの検索キーワードに対応させるデータベースを構築する手続きが必要となる。この手続きを遡れば，データベース化の作業工程や必要な工数の概要が見えてくる。

まず，それぞれ通常のパラグラフ・ライティングのスタイルで書かれた通常の文書としての「活動体験記」を加工する工程が必要である。テキストマイニング解析によって「就職活動体験記」に頻出する用語を抽出しなければ検索キーワードの「紐つけ」が不可能だからである。この加工の前処理は「分かち書き」ソフトを用いたキーワード抽出である。

今回の報告は，その過程と記述的特徴のうちのいくつかの傾向をまとめたものである。

１．４　今日のキャリア教育における情報技術の活用について

キャリア・就職活動支援とコンピュータと

言えば，我が国においてはハローワークなど公共職業紹介機関の情報検索システムや，求人情報出版，人材活用・広告コンサルタント企業などによって運営されている「就職活動サイト」などを思い浮かべることが多い。これらのシステムには，企業名，業種，職種，勤務地，待遇など多様な条件で希望に合う組織の求人情報を検索できる機能が備えられている。また，就職活動支援サイトでは，簡易版ながらも，探索者の職業興味やパーソナリティ傾向，特定の職種（SE，プログラマ，一般事務職，接客スタッフなど）への適性を調べる自動診断システムが備えられているものもある。さらに，就職活動体験について，サイトに同時的にアクセスしている仲間と語り合うための掲示板やツイッターなどを含んでいる場合も多い。

海外では，ズンカーZunker（2006）やシャーフSharf（2010）は，コンピュータ・キャリアガイダンス・システム（computer-assisted career guidance systems）として，American College Testing ProgramによるDISCOVER（ACT, Inc. 2007）や，双方向型情報ガイダンスシステムSystem of Interactive Guidance and Information（SIGI）（Katz, 1975, VALPAR International, 2007）など，性格傾向，認知処理能力，職業興味と価値観についての個別的要素の自己評価をサポートするシステムが，1970年代頃からアメリカでは実際に利用され始め，今日もなお頻用されていると報告している。このうち，SIGIは自己の価値観を自己評価して認識するところからキャリア探索することを強調するのに対し，DISCOVERはある部分は スーパーの生涯キャリア発達の理論に基づいたガイダンスを行う内容である。両者が両立して頻用されるのは機能的な差別化がなされているからである。両システムの価値はまた膨大な職業領域情報のデータベースを有している点である。ブレイクBrake（2001）はDISCOVERを54名の養子青年（養育の貧困のために里親制度によって養親を得た青年の意）に実施したところ，DISCOVERの全編版を使った群が，短縮版を使った群よりも，職業志望リストとして挙げる数量の増加が見られたと報告している。また，ブライアーBleier（2007）はDISCOVER とキャリア・カウンセリングを併用したアプローチを受けた学生の成績GPAが向上したと報告している。

インターネット環境でもキャリアガイダンス・サービスが展開され続けている。サービス領域の概略としては，1）キャリア・カウンセリングを提供する組織の広報，2）職業教育とインターンシップに関するサイト，3）求人情報，4）求職情報　の4種に大別される。合衆国の最も著名なキャリア・カウンセリング組織はNational Career Development Association（国立キャリア開発機構）であり，この組織は公式の免許を有するキャリア・カウンセラー情報を発行している。シャーフSharf（2010）はO＊NET「職業情報ネットワーク・オンライン（Occupational Information online）」を有名な情報集約サイトとして紹介している。さらに各大学もキャリア・サポート情報をそれぞれの大学サイトに掲載している。

一方で，キャリア教育場面でのガイダンスとサポートシステムとしてのコンピュータ利用は，対面的なカウンセリングとは性質が異なり，カウンセリング場面にある真の双方向

性機能を代替できるものではないと強く指摘されてもいる。コンピュータ環境上の情報は今日では過多の水準に達しており，迷いながら情報収集する青年は，これらの情報ソースにアクセスすればするほど，自身のキャリア・イメージが冗長なものになる危険性もあり，このことはズンカーZunker（2006）も指摘している。我が国の求人・就職活動支援サイトを観察していても同様か，それ以上の状況がある。

本研究が対象とする「就職活動体験記」を，青年自らのキャリア探索過程の体験の言語化と自己分析の手続きとして適用すること，特にこのような「記録」をデータベースとしてネット上で検索閲覧できるように公開しているケースは，まだ顕れていない。

本研究では，学生がキャリア探索過程で自発的にアクセスし，仲間（同輩・先輩）の類似的な体験記を検索して自学自習するシステムの構築に向けた準備作業について報告する。

２．方法１：対象者と実施手続き(「就職活動体験記」の課題指示など)

東京都内のビジネス系短期大学(通学課程)に在籍する2年次生が，今回の分析対象である「就職活動体験記」を執筆した。ビジネス系短期大学という課程の特性から，対象となる「就職活動体験記」の執筆者は殆どが女子学生である。(男子学生比率は学年の1%未満である。)「就職活動体験記」は必修科目「学びのサポート」の中で，2年生が1年生と交流し，就職活動のためのアドバイスを提供するための事例型教材として準備されてきたものであり，この取組みは2007年度より開始され，2010年度で4年目を迎えている。

本研究で分析の対象とする「就職活動体験記」はデジタルデータとして収集することができたものである。その対象者数は表1のとおりであった（表１参照)。

３．方法２：テキストマイニングで探索する就職活動体験の記述を解析する

３．１　「就職活動体験記」を構成する段落の感情カテゴリ抽出について

個々の学生によって記述された「就職活動体験記」は学内クローズドのサーバ上に設置された課題提出用フォルダに保存され，教員によって回収された。

回収した個別データは，学生の個人名を削除し機械的に発生させたID番号を付与した上でテキスト型データファイルに加工し，IBM-SPSS Text Analytics for Surveys ver. 4.0を用いて，分かち書きしたキーワードに対応するポジティヴ（本ソフト上では「良い」と表示される）－ネガティヴ（同じく「悪い」と表示される）段落のカテゴリ別抽出を行った。さらにその後，文章解析ソフトウェア

表１　「就職活動体験記」作成の対象者数

	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度
記述者数	169	382	444	458
総段落数	887	1828	1980	1827

「Word Miner」（日本電子計算株式会社製）を用いて，分かち書きされた用語の出現状況により，対応分析（数量化III類）を行い，クラスター化を図った。

４．結果：「就職活動体験記」の感情体験の記述を含む主題分析

４．１　文章を構成する段落の感情カテゴリによる分類と出現率

表2-1は，年度毎に計測した総段落数に占める段落カテゴリのポジティヴ－ネガティヴの比率を示している。ただし，1つの段落の中にネガティヴな展開とポジティヴな展開が混在するケースもある。このため，この分類は多重分類となり，合計値が総段落数を超えることも起こっている。

2007年度にはネガティヴ－ポジティヴ段落の出現比率に大きな差異は見られなかったが，以降の3年間はネガティヴ段落の比率が多くなっていることが示されている。

表2-2では，表2-1で示したネガティヴ段落，ポジティヴ段落それぞれの上位カテゴリを示す。ただし，「ネガティヴ－悪い」「ポジティヴ－良い」は，他のカテゴリに分類されない

表２-１　年度毎に計測した総段落数に占める段落カテゴリの出現比率

ポジティヴ－ネガティヴ分類	2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度
ネガティヴ(悪い)	92.56%	122.59%	124.95%	118.12%
ポジティヴ(良い)	84.22%	99.89%	91.97%	94.75%

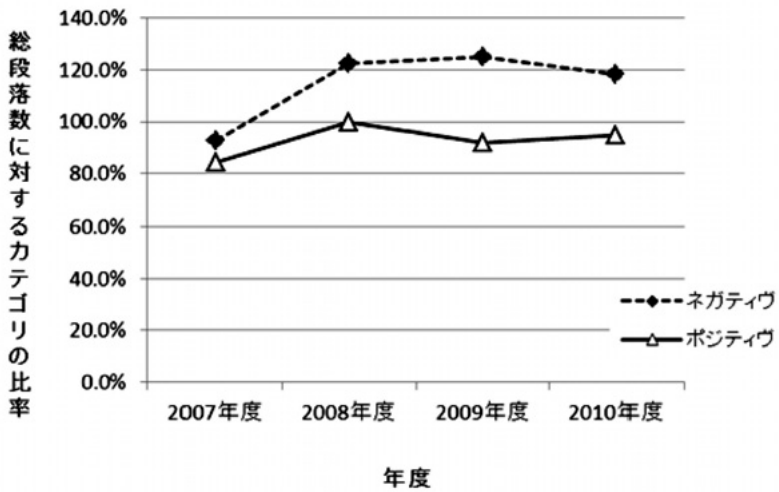

Fig.1
ポジティヴ感情、ネガティヴ感情を含む段落カテゴリの出現率の推移

表２-２　分かち書きしたキーワードに対応するネガティヴーポジティヴ段落の出現比率の推移

Negative(N) or Positive(P)	分類	2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度
N	悪い	24.6%	34.0%	36.1%	36.9%
N	悲しみ全般	9.5%	12.1%	11.0%	13.4%
N	困っている	10.8%	12.4%	11.9%	11.3%
N	不満	9.1%	11.3%	12.4%	10.1%
N	不安	7.7%	11.1%	8.3%	6.7%
N	諦め	4.3%	4.5%	6.7%	6.7%
N	後悔	2.5%	5.9%	6.4%	5.6%
N	残念	2.3%	4.6%	4.4%	5.1%
N	悩み	7.0%	5.9%	5.3%	4.6%
N	凶報	1.4%	2.6%	3.4%	3.2%
N	謝罪	3.2%	3.1%	2.8%	2.2%
P	良い	30.3%	32.8%	35.5%	34.4%
P	嬉しい	13.8%	15.8%	11.8%	11.8%
P	安心	7.7%	14.6%	11.4%	10.1%
P	褒め・賞賛	10.9%	8.0%	7.1%	7.9%
P	楽しみ全般	4.2%	6.2%	5.8%	7.4%
P	満足	4.6%	4.8%	5.7%	6.3%
P	感謝	4.1%	4.8%	4.7%	4.5%
P	吉報	2.6%	3.1%	2.4%	2.8%
P	好き	2.3%	3.7%	2.9%	2.6%
P	快い	2.1%	2.6%	1.9%	2.3%
P	幸運	0.0%	1.7%	1.2%	2.1%

否定的あるいは肯定的表現をソフトウェア側の処理によってまとめたカテゴリであるため，以降の解析からは除外する。

４．２　頻出キーワードに対応するネガティヴ段落の内容をクラスター化する

今回の研究はキャリア支援上，緊急介入を要する重要なシチュエーションを学生の活動体験記録から抽出し，具体的な項目などを読み解くことをも目標としている。このため，以降の対応分析ではネガティヴ段落カテゴリを優先し，そのうち今回2010年度に収集したデータにおいて5%以上を示したものについての解析を行うこととする。

今回はネガティヴ段落カテゴリのうち，特に出現比率の高いものについて解析を行った。例えば表3-1は「悲しみ全般」カテゴリに含まれる記述に見られる用語のクラスター化の結果を示す表である。今回の研究では，説明率が10%を超えたものについて対応分析（数量化III類）を行った。就職活動の過程で，学生がどのような感情体験をしているか，その感情が生起しやすい場面や主題の概要がこれらの用語の連続に反映されていることが示

されている。（なお，今後登場する「クラスター番号」は，システム的に自動付与される番号であり，完全に名義的なものである。この番号は収束率や出現率などとも無関係である。）

４．２．１　「悲しみ全般」カテゴリの内容クラスター

「悲しみ全般」カテゴリで10%以上を示すクラスターについて抽出された語の内容から，その指向する意味を解析する。

第1クラスターには「推薦」「エントリーシート」「筆記試験」「受けて」「通った」「結果」「連絡」「落ち込み」などの言葉が挙がっている。「エントリーから試験，面接，結果連絡」に関する言葉のクラスターであることが示されている。このクラスターの出現頻度が最も高かったのは2009年度（30.9%）である。第12クラスターでは，「仕事」「興味」「企業」「キャリア支援センター」「職種」「相談」「合同説明会」が挙がっている。学内のキャリア支援センターなどで自分の志向性と実際の求人状況を調べながら活動準備をしている時期の様子が示されている。「キャリア支援センターを拠点とした活動準備・探索」のクラスターである。このクラスターは2010年度が最も高い（35.7%）。第14クラスターとして，「内定」「メール」「辞退」「もらって」「辛い」「みんな」「おめでとう」「ありがとう」「友人」「Ｔ先生」などの言葉が抽出された。就職活動をする学生本人に対して，周囲の人間がどのような言葉をかけていたかなど，「人間関係による支援ネットワーク」が読み取れるクラスターである。（出現率は2007年度が25%で最高値であり，その後高低している。）「悲しみ全般」文脈では，4位の第2クラスターまでが10%以上の出現頻度を示していた。第2クラスターは，「質問」「面接」「面接官」「自己紹介」「自己ＰＲ」「志望動機」「緊張」「笑顔」「途切れ」など，「面接場面の体験」についての言葉が集まったクラスターであることを示している。第2クラスターは2007年度に16.7%の出現率を示し，その後2010年度まで減衰し続けている。

４．２．２　「困っている」カテゴリの内容クラスター

「困っている」カテゴリで10%以上を示すクラスターについて抽出された語の内容から，その指向する意味を解析する。

表３-１　「悲しみ全般」カテゴリで，総計5%以上の内容クラスター

No.	クラスター ＼ 年度	2007	2008	2009	2010	総計
1	エントリーから試験、面接、結果連絡	27.4%	21.3%	30.9%	24.6%	25.7%
12	キャリア支援センターを拠点とした活動準備・探索	16.7%	16.7%	20.7%	35.7%	23.9%
14	人間関係による支援ネットワーク	25.0%	17.2%	15.7%	17.6%	17.8%
2	面接場面の体験	16.7%	12.2%	12.0%	7.0%	11.0%

表３-２　「困っている」カテゴリで，総計5%以上の内容クラスター

No.	クラスター ＼ 年度	2007	2008	2009	2010	総計
1	志望先への期待と結果、失望	22.9%	16.4%	17.8%	15.9%	17.5%
7	周囲の人との交流とそれに伴うストレス	18.8%	12.8%	8.9%	15.0%	12.9%
23	キャリア支援センターなどの情報・人的資源の活用	0.0%	8.0%	14.0%	14.5%	10.6%

第1クラスターには「不採用」「結果」「選考」「第一」「最終面接」「最終選考」「通知」「初め」「期待」「ショック」「志望」「本命企業」などの言葉が集約されている。「志望先への期待と結果，失望」について書かれているクラスターである。このクラスターの出現頻度が最も高かったのは2007年度（22.9%）である。第7クラスターでは，「友人」「内定」「周り」「将来」「一緒」「メール」「相談」「鬱」「ストレス」「気分転換」「仲」「先生」など，「周囲の人との交流とそれに伴うストレス」についての言葉が集まっている。このクラスターは2007年度が最も高い（18.8%）。

第23クラスターとして，「キャリア支援センター」「相談」「求人」「紹介」「アドバイス」「興味」「一般企業」「学校推薦」「学内説明会」「面接練習」などの言葉が抽出された。「キャリア支援センターなどの情報・人的資源の活用」が読み取れるクラスターである。（出現率は2010年度が14.5%で最高値を示している一方で，2007年度には全く見られなかったクラスターである。）

４．２．３　「不満」カテゴリの内容クラスター

「不満」カテゴリで10%以上を示すクラスターについて抽出された語の内容から，その指向する意味を解析する。

第1クラスターには「仕事」「企業」「エントリー」「求人」「興味」「就活」「キャリア支援センター」「周り」「相談」などの言葉が挙がっている。「エントリーまでの探索と相談」に関する言葉のクラスターであることが示されている。このクラスターの出現頻度が最も高かったのは2010年度（41.8%）である。第2クラスターでは，「メール」「電話」「金融業」「届いて」「結果」「グループディスカッション」「連絡」「繋がる」「メールアドレス」が挙がっている。メールや電話などで周囲の支援リソースの人たちと連絡を取り合う中で志望先を考えている様子が読み取れる。「周囲の支援ネットワークとの通信」のクラスターであろう。このクラスターは2007年度が最も高い（22.7%）。第3クラスターとして，「面接」「練習」「筆記試験」「とても」「自信」「自分」「入りたい」「進む」「結果」「経験」「できた」「内定」「不採用」などの言葉が抽出された。「筆記などの試験結果」を書いているクラスターである。（出現率は2010年度が22.3%で最高値であり，その後高低している。）「不満」文脈では，4位の第6クラスターまでが10%以上の出現頻度を示していた。第

表３-３　「不満」カテゴリで，総計5%以上の内容クラスター

No.	クラスター＼年度	2007	2008	2009	2010	総計
1	エントリーまでの探索と相談	22.2%	32.5%	38.2%	41.8%	35.7%
2	周囲の支援ネットワークとの通信	22.2%	9.7%	11.8%	11.4%	12.3%
3	筆記などの試験結果	17.3%	18.4%	15.4%	22.3%	18.3%
6	面接場面で体験したこと	14.8%	12.1%	11.4%	6.5%	10.7%

表３-４　「不安」カテゴリで，総計5%以上の内容クラスター

No.	クラスター＼年度	2007	2008	2009	2010	総計
1	キャリア支援センターなどを拠点として自身のキャリア志向性を探索する	41.2%	36.9%	45.7%	50.4%	43.0%
6	周囲の支援ネットワークと通信しながら進める活動	14.7%	20.7%	11.6%	8.1%	14.5%
5	試験・面接の場面で経験したこと	8.8%	8.9%	17.1%	17.9%	13.3%

6クラスターには，「質問」「面接」「内容」「答える」「面接官」「答え」「緊張」「志望動機」「集団面接」「必死」「自己ＰＲ」「予想外」など，これも「面接場面で体験したこと」についての言葉が集まったクラスターである。第6クラスターは2007年度に14.8%の出現率を示し，その後2010年度まで減衰し続けている。

４．２．４　「不安」カテゴリの内容クラスター

「不安」カテゴリで10%以上を示すクラスターについて抽出された語の内容から，その指向する意味を解析する。

第1クラスターには「自分」「内定」「相談」「やりたい」「仕事」「推薦」「企業」「気持ち」「業種」「エントリー」「業界」「アドバイス」「求人」「紹介」「キャリア支援センター」などの言葉が挙がっている。「キャリア支援センターなどを拠点として自身のキャリア志向性を探索する」クラスターである。このクラスターの出現頻度が最も高いのは2010年度（50.4%）である。第6クラスターでは，「メール」「連絡」「電話」「返信」「予約」「ブログ」「心配」「返事」「届いて」「コーディネート」「見学会」など，電話やメールなどで周囲の支援リソースの人たちと連絡を取り合いながら説明会に参加するなど行動を決めている様子が読み取れる。「周囲の支援ネットワークと通信しながら進める活動」のクラスターである。このクラスターは2008年度が最も高い（20.7%）。第5クラスターとして，「面接」「質問」「面接官」「自己ＰＲ」「順番」「話す」「緊張」「エントリーシート」「上手く」

「志望動機」「筆記試験」「グループディスカッション」「準備」「人事」「意見」「答える」などの言葉が抽出された。このクラスターも「試験・面接の場面で経験したこと」を示している。第5クラスターが最も高いのも2010年度で，17.9%の出現率である。

４．２．５　「諦め」カテゴリの内容クラスター

「諦め」カテゴリの第1クラスターには「面接」「興味」「内定」「相談」「最終面接」「業種」「キャリア支援センター」「エントリー」「業界」「紹介」「短大」「仕事」「夢」「推薦」などの言葉が挙がっている。「キャリア支援センターを拠点とした応募と選考などを含む就職活動」についてのクラスターである。このクラスターの出現頻度が最も高いのは2009年度（57.1%）である。第5クラスターとして，「大切」「諦めず」「自分」「最後」「通して」「行動」「学びました」「繋がる」「これから」「努力」「頑張って」「重要」「人生」「実感」「取り組む」「続けて」「決して」「必要」「経験」など，対応分析上「ネガティヴ」とラベルづけされても，実際の内容は「反・諦め」を強調し，「継続性の重要さに気づいた」教訓的なクラスターということができる。このクラスターは2010年度が最も高い（27.9%）。第19クラスターとして，「駅」「電車」「地図」「会場」「道」「時間」「出口」「着く」「場所」「目印」「間に合う」「建物」「歩き」「ビル」「タクシー」「遅れて」「３０分前」「アナウンス」「始まる」「たどり」「説明会」などの言葉が抽出された。このクラスターは「説明会・試験・面接までのアクセス」について書いている。第5クラスターが最も高いのは2008年度で，20.5%の出現率を示している。

４．２．６　「後悔」カテゴリの内容クラスター

「後悔」カテゴリの第1クラスターには「内定」「早く」「勉強」「夏休み」「自分」「辞退」「ペース」「焦る」「友達」「相談」「決まって」「周り」「就きたい」「６月」「先生」「続けて」などの言葉が挙がっている。「早く内定を取りたいと活動準備をしながらも進路先に迷い焦った」ことを後悔するクラスターである。このクラスターの出現頻度が最も高いのは2010年度（50.0%）である。第5クラスターでは，「質問」「面接」「緊張」「答える」「一次試験」「志望動機」「自己ＰＲ」「上手く」「グループディスカッション」「真っ白」「集

表３-５　「諦め」カテゴリで，総計5%以上の内容クラスター

クラスターNo. ＼ 年度		2007	2008	2009	2010	総計
1	キャリア支援センターを拠点とした応募と選考などを含む就職活動	34.2%	36.1%	57.1%	47.5%	47.1%
5	継続性の重要さに気づいた	18.4%	12.0%	19.5%	27.9%	20.5%
19	説明会・試験・面接までのアクセス	7.9%	20.5%	12.0%	9.8%	12.8%

表３-６　「後悔」カテゴリで，総計5%以上の内容クラスター

No.	クラスター＼年度	2007	2008	2009	2010	総計
1	早く内定を取りたいと活動準備をしながらも進路先に迷い焦った	27.3%	35.2%	39.4%	50.0%	40.4%
5	試験・面接の場面で経験したこと	36.4%	19.4%	20.5%	16.7%	20.1%
2	キャリア支援センターで受ける応募書類の確認指導	18.2%	13.9%	20.5%	14.7%	16.7%
16	説明会・試験・面接までのアクセス	13.6%	8.3%	12.6%	9.8%	10.6%

団面接」「雰囲気」「内容」「自信」「自己紹介」「２次面接」「聞かれる」など，「試験・面接の場面で経験したこと」に言及しているクラスターである。このクラスターは2007年度が最も高い（36.4%）。

第2クラスターとして,「エントリーシート」「履歴書」「メール」「確認」「チェック」「書類選考」「キャリア支援センター」「提出」「業界」「視野」「情報」「記入」「紹介」「書類」「広げて」などの言葉が抽出された。このクラスターには「キャリア支援センターで受ける応募書類の確認指導」についての記述が集中している。第5クラスターが最も高いのは2009年度で，20.5%の出現率を示している。第16クラスターとして，「駅」「会場」「地図」「道」「電車」「場所」「時間」「出口」「到着」「歩いて」「遅刻」「ビル」「余裕」「駅員」「乗り換え」「建物」「名前」「事前」「確認」「本社」「説明会」などの言葉が抽出された。ここでも「説明会・試験・面接までのアクセス」についてのクラスターが抽出されている。第5クラスターが最も高いのは2007年度で，13.6%の出現率を示している。

４．２．７　「残念」カテゴリの内容クラスター

「残念」カテゴリの第3クラスターは「仕事」「やりたい」「夏休み」「周り」「相談」「春休み」「２年生」「やる気」「冬休み」「友達」「自分」「挑戦」「地元」「エントリー」「終わり」「ペース」など，「活動スケジュールと学年暦をめぐる自分と周囲の動き」についてのクラスターである。このクラスターの出現頻度が最も高いのは2010年度（55.3%）である。第1クラスターでは，「最終面接」「結果」「質問」「緊張」「残念」「内容」「人事」「準備」「履歴書」「志望動機」「作文」「落ちて」「練習」「企業研究」「筆記試験」「一次試験」などの言葉が抽出されている。「事前作文などの書面審査と試験」に言及しているクラスターである。このクラスターの出現率では2009年度が最も高い値となっている（39.8%）。

４．３　感情関連語の対応分析から抽出されたクラスターのラベルと類型

今回の研究はキャリア支援上，緊急介入を要する重要なシチュエーションを学生の活動

表３-７　「残念」カテゴリで，総計5%以上の内容クラスター

No.	クラスター＼年度	2007	2008	2009	2010	総計
3	活動スケジュールと学年暦をめぐる自分と周囲の動き	55.0%	34.5%	45.5%	55.3%	46.2%
1	事前作文などの書面審査と試験	30.0%	35.7%	39.8%	36.2%	36.7%

体験記録から抽出し，具体的な項目などを読み解くことをも目標としてきた。2010年度収集分の「就職活動体験記録」の中のネガティヴ段落として5%以上の出現率を示したもののうち，特に出現比率の高いネガティヴ記述の段落に含まれる語についてのクラスター化を試みた。特に各段落の特徴を示すと考えられる語として，10%の出現比率を超えたものについて対応分析（数量化III類）を行い，そこから抽出された語の上位語リストから，就職活動の過程で，学生の中にそれぞれの感情が生起しやすい場面や主題の概要を読み解いた。

前項の「結果」においては，感情関連語の対応分析から抽出されたクラスター内の関連語の構成をもとに，それぞれのクラスターラベルを付与した。さらにその内容的な類似性から，大別して７種の類型にまとめ，コード番号を付与した（表4参照）。さらに表4を図解したものがFig.2である。

ネガティヴ段落に含まれる出現率の高い感情関連語に対応する言葉を解析し図解に展開してみると，Fig.2のようにそれが生起しやすい場面や主題が見えて来る。学生たちのネガティヴ感情体験としてほぼ一致している主題は「1　試験・面接の結果」であり，「2 キャリア支援センターを拠点とした活動準備と進路探索行動」，「4　面接場面での体験」についての後悔などである。一方で，困難な状況の中で「3　人間関係から得られる支援」を体験している学生も多いことや，そのような「周囲の仲間」との関係の中で就職の「7 活動スケジュールと学年暦をめぐる自分と周囲の動き」を意識することで，活動を開始するきっかけを得ている姿も示されている。「諦め」の感情記述は，用語的にはネガティヴ段落に分類されるが，内容的には「諦めるのは早計」という教訓を得たという「5（教訓としての）継続の重要性」についての体験を示す記述が多い。これは今回の解析で新たに示された事実である。

事前の指導介入が可能で，しかもその出現率において決して見過ごしにできない「6 説明会・試験・面接会場へのアクセス」のような記述群もある。

４．４　代表的な段落記述の例

ネガティヴ段落カテゴリとして出現率の高いものを挙げ，それぞれに含まれる場面を読み解いた。このような解析手法におけるもう一つの課題は，それぞれのカテゴリの再定義もしくは実際に書かれた文章の文脈上の意味の再確認である。

Fig.2のようにネガティヴ段落に挙がる感情体験が生起しやすい場面や主題を一目でわかるようにすることは，多人数の学生の最大

表４　感情関連語の対応分析から抽出されたクラスターのラベルと類型コード

ネガティヴ段落のカテゴリ	クラスター番号	出現率	クラスターにつけたラベル	記述内容から付与した類型コード
悲しみ全般	1	25.70%	「エントリーから試験、面接、結果連絡」	1
	12	23.90%	「キャリア支援センターを拠点とした活動準備・探索」	2
	14	17.80%	「人間関係による支援ネットワーク」	3
	2	11.00%	「面接場面で体験したこと」	4
困っている	1	17.50%	「志望先への期待と結果、失望」	1
	7	12.90%	「周囲の人との交流とそれに伴うストレス」	3
	23	10.60%	「キャリア支援センターなどの情報・人的資源の活用」	2
不満	1	35.70%	「エントリーまでの探索と相談」	2
	2	12.30%	「周囲の支援ネットワークとの通信」のクラスター	3
	3	18.30%	「筆記などの試験結果」	1
	6	10.70%	「面接場面で体験したこと」	4
不安	1	43.00%	「キャリア支援センターなどを拠点として自身のキャリア志向性を探索する」	2
	6	14.50%	「周囲の支援ネットワークと通信しながら進める活動」	3
	5	13.30%	「試験・面接の場面で経験したこと」	4
諦め	1	47.10%	「キャリア支援センターを拠点とした応募と選考などを含む就職活動」	2
	6	20.50%	「継続性の重要さに気づいた」教訓	5
	5	12.80%	「説明会・試験・面接までのアクセス」	6
後悔	1	40.40%	「早く内定を取りたいと活動準備をしながらも進路先に迷い焦った」後悔	2
	5	20.10%	「試験・面接の場面で経験したこと」	4
	2	16.70%	「キャリア支援センターで受ける応募書類の確認指導」	2
	16	10.60%	「説明会・試験・面接までのアクセス」	6
残念	3	46.20%	「活動スケジュールと学年暦をめぐる自分と周囲の動き」	7
	1	36.70%	「事前作文などの書面審査と試験」	1

公約数的な「必要」を探すためには有益である。しかし一方で，この類型化の作業が断片的に抽出される言葉をつないで得られるだけのものであることには注意しておかなくてはならない。例えば「2　キャリア支援センターを拠点とした活動準備と探索行動」というラベルを読んで，不安にならない関係者はいないからである。これらのデータ解析は，大量サンプルの分類や処理のために行う。抽出した初段階の結果の使い方をミスすると，学生が本当に必要としていることを読み間違える新たな問題を生む原因ともなる。またキャリア支援を担当する関係者の行動をミスリードし，モティベーションを阻害する誤謬に導

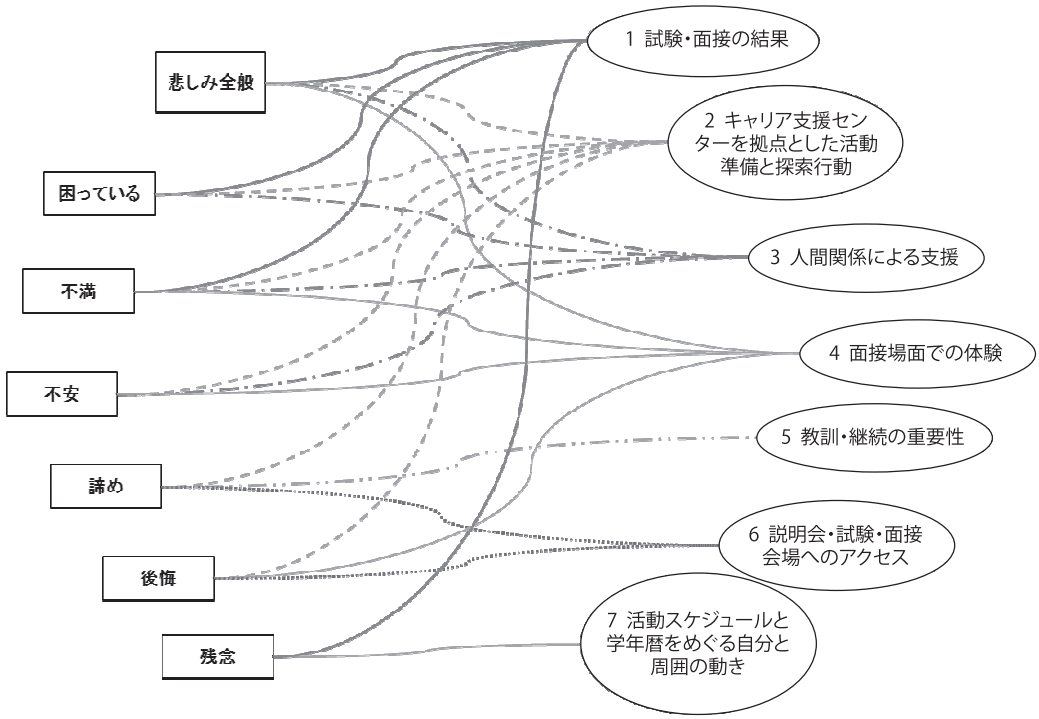

Fig.2 感情関連語と類型ラベルづけされたクラスターについて読解された共有関係

く事態も懸念される。そのようなミスは厳に回避しなければならない。

Fig.2では「不安」や「不満」のカテゴリが「2　キャリア支援センターを拠点とした活動準備と探索行動」につながっている。このような時は「就職活動体験記録」原文を検索し，読み直すことが重要である。そうすることで，抽出される語の間のつながりや流れが確認できる。原文に照会すればFig.2が，「キャリア支援センターの対応に不安や不満を感じている図解である」などと読み取るのが大きな誤りであることがわかる。

今回も原文サンプルの再検索を行い，文脈的な意味の確認を行った。この手続きによって，ネガティヴ・カテゴリとは，学生が自分の置かれている状況・活動開始の時期に不安を感じ，自分自身の不充分な取り組み姿勢に不満を感じているという内容であることを確認した。特にここで語られるキーワードは，学生自身が取り組みの過程で不充分な自分を知り，たとえばキャリア支援センター（機関・職員）を頼って行くという流れを表していると確認できた。

5．議論と考察：頻出する感情体験語と周辺文脈の検討

5．1　感情体験関連語を含む段落を確認する

ネガティヴ段落に含まれる出現率の高い感情関連語に対応する言葉を解析し図解に展開してみると，Fig.2のようにそれが生起しやすい場面や主題が見えて来ることがわかる。もちろん類型化は断片的に抽出される言葉を

つないで得られるものである。運用・管理者は自戒しなければならない。

今回の解析は，就職活動というチャレンジの過程で各学生が書いた活動記録を，マス・データの状態からできるだけ迅速に全体的傾向を知ると同時に，個別の要・介入事例を最小の過誤の範囲で探索するための一つの手段ととらえてきた。したがって，このような加工作業の結果，懸案の結果が抽出されたと認識される場合は，個別の記録や原文に立ち返り，再度の検索・抽出手続きを繰り返さなければならない。その上でさらに必要がある場合には，その学生本人と直接に相談介入をするのが適切である。

今回は迅速な介入の必要性を考慮して，ネガティヴ段落の対応分析から着手した。実際の対応分析から抽出された記述類型の背後の原文を検索し概観すると，ネガティヴ段落中の頻出語群からは，活動を困惑させ，学生の取り組みを立ち往生させる障害場面が示唆されてくる。そればかりではなく，学生が困難に対処する力を身につけるきっかけとなり，精神的にもちこたえて自分の力で気分を回復させるヒントを提供する支援拠点として「キャリア支援センター」が機能していることも確認できた。対応分析の手法では，ネガティヴ段落の中に，教訓的な考察や，学生の困難をサポートする重要なリソースを含んで出力が為されるのである。

また段落の対応分析によって一定の視点を得て，さらに原文の読み方が焦点づけられるという効用も今回の研究から示された。本研究が対象とした学生自身の手による「就職活動体験記」は，２年次生が就職活動前夜の１年次生のための事前経験の教材と位置づけられて継続されてきた。執筆者となる２年次生には，執筆前段階のインストラクションにおいて１年次生との「学びのサポート」の授業の中で２年次生自身が教材として使用する資料として書くよう方向づけられている。つまり２年次生のほぼ全員が，自身の経験をよい形で後輩に引き継ぎたいという立場で節度を保って執筆したのが今年度までに継続され蓄積されてきた「就職活動体験記」である。教員からの修正指示も，原稿への加筆も必要がない状態で今回の解析にかけるサンプル・データとすることができた背景には，それが後輩など他者に向けて公開されることを前提としたうえで，自身の体験を総括する機会として課題の意義を適切に捉えていたことがある。この価値の理解を前提として自らの体験を記録として書くなら，その作業は学生自らの主観的経験を客観的にとらえ直す価値をもつはずである。またキャリア支援に当たっているスタッフにとっては，節度あるマナーに則って書かれた信頼に足る支援介入の手がかりとなることは論をまたない。

ここまでの教育手法としての１次的価値が担保された先の，さらなる課題は，当然，この長大な記録データの活用ということになろう。

５．２　対応分析を活用した具体的な介入指導の可能性について

今回の解析から，「6　説明会・試験・面接会場へのアクセス」といった事項が代表的なネガティヴ段落の内容類型の1つとして挙がるほどに重大な課題であるとは，教員は予測していなかった。記述の作業によって自らの体験を内面化させることを避けるために，こ

のようなことを「卑近な失敗例」として挙げることで課題から逃げてしまう学生を除けば，副次的な収穫の例として見るべき価値もあると考える。「6　説明会・試験・面接会場へのアクセス」に収れんする記述内容は，学生にとって，地図や路線図，時刻表や駅構内案内図だけを頼りに未知の土地を独力で，時間的制約の中で訪ねあてることが決して簡単ではないことを示している。体験記録の原文を読む作業だけでは「そういうことで困難に直面する学生もいる」程度の漠然とした印象だけで終わってしまうかもしれない。しかし今回の解析のように1つの類型として一定の群を形成することが示されれば，早急な事前教育訓練の主題とすることもあり得る。

学生たちが就職活動の過程で遭遇する困難や課題のすべてに対して，キャリア支援に携わる教職員が限られた時間の中で支援介入を行うのは，実務的には不可能である。この項目のように多くの学生に共通する「代表的な課題」が示されるなら，まず，その対策から早急に着手することも意味があるだろう。

6．結論および今後の課題

学生による「就職活動体験記録」の活用には，大別して4つの効用がある。第一は，学生自身が自分の経験を他者の視点をもって節度ある客観化と総括をする作業として価値があるということである。第二に，彼らが直面している就職市場の動向とそれに伴う困難や困惑の実態を教育スタッフ，キャリア支援スタッフが，そのメンタル面の様相をも推測できる形で知る手がかりとすることができる点である。第三は，年度毎の背景的な求人状況で多少の変動があるものの，先輩から後輩への活動経験や情報，教訓などの伝承が可能になる利点である。

第四は，前項の「伝承機能」をさらに発展させた時にその効用はさらに大きなものとなるはずである。今後は，先行経験者の体験記録を，類型場面や感情体験カテゴリによって検索でき，しかもターゲットとする目標に類型的なリンクをもつ事例を提示し得るシステムの構築に向けてさらなる検証を行いたい。

今回はネガティヴ段落において大きな柱となる場面類型を推定することができた。大きなサンプル群のデータから概要をいち早く掴むこの手法の有効性が確認できた一方で，この対応分析によって機械的に出力される内容を確認し深い部分までを読み解くのは，最終的にはやはり人間の手に戻ることになる。

今後，本研究に続く課題として，書く主体にとっての「就職活動体験記」作成の効用が，読む主体である「後輩たち」の「就職活動前夜」に対し，どのよう役に立つのか検討するべきである。「読み手」の興味と関心，問題意識，モティベーションを確認することはまた，検索システム構築においても重要な要素となる。

本研究は，文部科学省科学研究費・基盤研究（c）課題番号22500953『学生間コミュニケーションを活性化するシステムを核としたキャリア形成支援プログラム』の一環として行われた。

参考文献

DISCOVER for Windows ACT, Inc. 2007, Iowa City, IA：Author

Erikson, E.H., 1968. Identity；Youth and

Crisis, W. W. Norton & Company, New York.

Bleier, J.K. The impact of career counseling plus DISCOVER (internet version) on the academic achievement of high school sophomores at risk for dropping out of school. Dissertation Abstructs International：Section B：The Sciences and Engineering, 68/2-B, 1294. 2007.

Brake, R.G., The effects of DISCOVER career guidance software on career decision-making self-efficacy of adolescents in foster care. Dissertation Abstructs International：Section B, 62/5-B, 2477. 2001.

Katz, M.R. SIGI：A computer-based system of interactive guidance and information. 1975. Princeton, NJ：Educational Testing Service.

Sharf, R.S. "Theories in Combination：Computerized Guidance Systems？Internet"：Chapter 16 of Applying Career Development Theory to Counseling. 5th Edition, 2005.　Brooks/Cole, CA. USA

Super,D.E. A life-span, life-space approach to career development. In D.Brown & L.Brook（Eds.）, Career choice and development：Applying contemporary theories to practice. 1990.San Francisco：Jossey-Bass. Pp.197-261.

VALPAR International SIGI3.［Computer Program］. Tuscon, AZ：Author. 2007.

渡辺三枝子，キャリアの心理学－キャリア支援への発達的アプローチ．新版，京都，ナカニシヤ出版，2007.

Zunker, Vernon G., "Technology in the millennium". From Career Counseling 7：A Holistic Approach, 2006. Thomson Brooks/Cole, Thomson Corporation, CA, USA